

The Indigenous in Herman Melville' s Works: Cyclical Revenge or Gospel

大島, 由起子

<https://hdl.handle.net/2324/1931989>

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (文学) , 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名 : 大島 由起子

論 文 名 : メルヴィル文学に潜む先住民——復讐の連鎖か福音か

The Indigenous in Herman Melville's Works: Cyclical Revenge or Gospel

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

Herman Melville の作品における人種表象の研究は、キャロライン・カーチャーの黒人表象の画期的な研究書『約束の地を覆う暗影』(1980年)を嚆矢として、黒人表象研究を中心に進展したが、先住民については長きにわたって等閑視されてきた。しかし、本書で示すことができたように、先住民に関わる主題は、黒人問題と同程度以上に重要であり、メルヴィル文学全体の根幹に位置するものである。

メルヴィル生存当時の白人至上主義のアメリカでは、先住民擁護の文面は検閲にかかったので、あからさまに先住民を擁護することはできなかった。そのために、メルヴィルは、修辭を忍耐強く磨き、作品内部に巧妙に隠すようにして盛り込んだのである。それゆえに、ほぼ全作品において先住民表象を掘り起こすことから始めて、その不確かなところは論証しつつ、先住民に関わる主題を解明する必要がある。本書は本著者の研究成果であり、本書の主たる主張は全て本書者が解明したものであることを付記しておく。

メルヴィルは、若き水夫時代の衝撃的なポリネシア体験により、先住民認識に变革を受けた。その食人種の先住の民は、敵対的であると信じ込まされていた北米先住民とは対照的に、融和的であった。それゆえに、メルヴィルは北米における白人と先住民との敵対関係に疑問を抱くことになったのである。

本書前編では、メルヴィル作品は白人と北米先住民との間で繰り返された報復戦争として読解できることを、明らかにしている。メルヴィルは、歴史は覆せぬものとし、最終的には、作品に潜ませた先住民あるいは先住民的な主人公には敗北させるのだが、同時代の作家とは異なり、容易には敗北させず、さらには何らかの形で密かにせめてもの勝利を与えている。すなわち、比喩的・象徴的には、見方を反転させる転覆の修辭を尽くして、せめてもの勝利を与えているのである。

この報復戦争の発端は17世紀に起きたピーコット戦争であるが、『白鯨』と『クラレル』に

においては、ピーコット族は、作品の表舞台には現れないのであるが、作品を背後で操り、『白鯨』の最後では、先住民が白きアメリカ帝国を地獄に引きずり込む。『ピエール』では、北米先住民女性であると推察できる女性主人公が白人女性に勝利を宣言する。「ベニト・セレノ」では、先住民テカムセに似た黒人バボの晒首が処刑後もねめつけ続ける。このねめつけは、奴隷制度のみならず北米先住民に対する扱いが不当であると、暗黙に主張しているのである。『信用詐欺師』や「書記バートルビー」などの作品にも、同様の主題が埋め込まれている。このように、メルヴィルは、先住民を擁護し、アメリカ批判と白人批判と近代呪詛を繰り返し、白人支配の時代に反抗したのである。

本書後編への橋渡しとなる短い中編では、メルヴィルのコスモポリタニズムという国家観が実体験に基づいていることを検証し、北米先住民の怨念の起源を確認している。若き水夫時代にポリネシアを衝撃的に体験しているメルヴィルにとっては、白人が大航海時代に世界規模で先住の民の文化を抹殺したのであり、樂園とは、古代ギリシア、ポリネシア、本来の北米先住民世界が渾然一体となったものである。この樂園は彼のコスモポリタニズムと同根である。北米先住民の怨念は白人支配に起因しているのである。

しかし、メルヴィルは批判に終始したのではない。作家人生の後半の諸作品には、この樂園とコスモポリタニズムが相補的に繰り返し現れる。本書後編では、メルヴィルの〈福音〉を明らかにしている。

メルヴィルは、『白鯨』では、異人種である二人の主要人物の親交を提示し、異人種共存を説く。「エンカンタダス」では、異人種間のささいな親切がチョラ救出の発端となっているというプロットにより、異人種共存による救済への道を表している。『クラレル』では、北米先住民は白人支配ゆえに陰湿になったのだが、本来はポリネシア人のように陽気で融和的だったのだらうという認識を示している。「聖なる煙草」では、北米先住民の友愛の魂を作品に結実させ、そして、遺稿「水夫ビリー・バッド」では、処刑される無垢な蛮人ビリーが処刑する側の白人を赦すのである。このように、異人種支配の愚かさ、すなわち異人種共存の重要性を説く〈福音〉を、心に浸透し響き渡る芸術作品として、メルヴィルは世に贈ったのである。

山上の垂訓を理想とするキリスト教徒でありコスモポリタンであるメルヴィルは、19世紀の白人至上主義のアメリカにおいて、独立宣言の自由・平等・博愛の精神からはほど遠い白人とアメリカに憤り、異人種への偏見を捨てて、アメリカ人こそが心広き人種観を世界に広めるべきだと説き、人類を破滅から救う異人種共存を説いたのである。

本書は、メルヴィル作品のほぼ全体にわたって先住民に関わる主題を解明したものであり、メルヴィル文学さらにはアメリカ文学の解明に大きく寄与するものである。